唐代伝奇「陸顒伝」に関する一考察（上）

増　子　和　男

前言

名著として夙に名高い、石田幹之助『長安の春』には、次のような内容を持つ一群の話が収録されている。[1]

ある人がなにかの機会にある宝物を手に入れる。この宝物は多くの場合一見きわめてつまらぬもののごとく思われるので当人はこれを宝物と知らずにいる。それをまたある機会にシナに来ている西域の商人に見せると非常に珍重して莫大な価をもってこれを買っていく（「西域の商胡、重価をもって宝物を求める話 ― 唐代支那に広布せる一種の説話について ―」）

石田氏は、こうした内容を持つ話を「胡人採宝譚」或いは「胡人買宝譚」と名付け、文字通り博引旁証、右記論文の補遺も含めると約三十の類話を収録している。[2]

本稿で取り上げる「陸顒伝」も、そうした話の一例としてそこに紹介されているものであった。いささか長くなるが、問題の所在を明らかにするため、その梗概を記すこととしたい。

① 主人公の陸顒は、科挙に失敗して太学に学んでいた。[3] 彼はいくらでも麺が食べられ、しかも食べるほどに痩せる体質である。ある時、南越（広東・広西地方）に住むという胡人数名が彼のもとを訪れ、[4] 種々の贈り物をしたいと申し出る。申し出を受けた陸顒であったが、いささか気味が悪くなり、友人の勧めもあって郊外に身を隠す。

② それにも関わらず胡人は彼の隠れているところを突き止めてやってくる。そして彼を探し求めたのはほかでもない。その腹中に「消麺虫」という得がたい宝があるためである。それを是非自分たちに譲ってほしいという。陸顒がそれを承諾すると胡人は薬を飲ませる。すると彼は、青い色の蛙のごときものを吐き出す。胡人たちは、それを大切そうにしまうと彼に莫大な謝礼を渡して立ち去る。

③ 胡人から得た謝礼で金持ちとなった陸顒は、太学もやめ、長安に邸宅・園林を構え、悠々たる生活を送る。ある日、件の胡

人たちが再びやってきて、海中の奇宝を取りに行こうと誘う。誘いに乗った陸顒は、胡人について南海まで出かけていく。胡人は、「消麵虫」を取り出すと油膏の入った鼎に入れて火にかける。すると海中から宝珠を入れた盤（大皿）を捧げ持った童子が出現する。ところが、胡人は宝珠を不服として童子をののしり、追い返す。このようにすること三度目にして、海中から仙人が持ってきた宝珠を見て、胡人は「至宝がきた」と言って、これを受け取る。宝珠を得た胡人は、これを呑むと自分について海中に入るよう、陸顒を促す。彼は、胡人の佩帯に掴まり、海中に入るが海水は豁然として開き、鱗介の族は辟易して彼らを避ける。竜宮や蛟室[3]に行った彼らは、おびただしい宝を得て、地上へと戻る。その宝の分け前を得た陸顒は、仕官することなく閩越（今日の福建地方）で一生を送った（『太平広記』巻四七六。出唐・張読『宣室志』[6]）。

さて、石田氏の紹介が、きっかけとなり、「陸顒伝」は、我が国でも広く知られるようになったものと見え、説話学や民話学、或いは史学の著作や論文などの材料として、さらにはまた、エッセーなどにも広く引用されるようになる。[7] ところが、このようにさまざまに引用される一方で、そのあまりに荒唐無稽と言ってよい内容も手伝ってか、本作品を一個の作品として論じたものは必ずしも多くはないようである。[8]

本稿では、その用語を主な手がかりとして、唐代小説「陸顒伝」について考えることとしたい。

一

まず、先行の著作や論文でも触れているいくつかの用語につき、整理しておきたい。[9]

〔1〕胡人

官僚志望の一書生にすぎない主人公のもとへ、ある日突然出現し、言葉巧みに近づいてくる胡人。しかも、どんなに彼らの目を避けて隠れ住もうとも、たちどころにその居場所を突き止めてしまう異能の持ち主。さらに、主人公に対する依頼は想像を絶するものである。利を追求するあくなき執念と、ある種得体の知れなさ――本作品で重要な役割を演ずる胡人もまた、唐代小説に頻出する胡人像の例に漏れず、そのようなものとして描き出されている。

良く知られているように、「胡人」という呼称には、① 異民族一般、② 波斯すなわち、イラン系の人々という広狭二義が存する。唐代において一般的には、後者、さらに限定的に言えば、ソグド人（粟特人。Sogdian ― 西トルキスタンのソグディアナを故郷とし、今日のウズベキスタンにあった都市国家群を形成したことで知られる）を指す。

作品中、作者は彼ら自身の口によって、「吾は南越の人なり。蛮貊の中に長ず。― 自分は、南越（広東・広西地方）の人で、異民族たちの間で成長しました ―」と称させている。そこで、ともすればこの胡人たちを直ちに東南アジア系の異民族であると考えがちではある。[10]

しかし、石田氏も既に指摘されているように、この自己紹介の後の一節、すなわち、「海を航し、山を梯して中華に至り云々」とあ

るのを見れば、右のように捉えるのには、いささか無理がある。もちろん、東南アジア人でも、「海を航し、山を梯し」と称して差し支えはないであろうが、やはりこの場合、右に記した狭義の「胡人」ないしは、大食（タージ）つまりアラビア人など、当時広く世界を交易して歩いた人々を念頭に置いた表現であると考えるべきではないか。南越地方には、これら西域からやって来た人々が数多く定住していたとされる。[11] しかも、後述するように、本作品の類話の多くは、西域の人々との関連が強く意識されている。となれば、当時の作者と読者との間の共通の認識として、「南越の胡人」と言えば、東南アジア人よりも、むしろ、これら西域の人を指すと考えていたと類推することの方が、より自然ではないかと思われるからである。[12]

〔2〕宝珠

唐代小説で胡人が語られるとき、その経済力とともに、「陸顒伝」に見えるのと同じく、宝に対する飽くなき執念と、それを見つけ出す鋭い霊感を語る話が少なくない。

彼らの宝への執念を示す言葉としてあまりにも有名なのは、太宗・李世民（六二六～六四九在位）の次の言葉であろう。

> 上（しょう）、侍臣に謂ひて曰く、「吾聞く、西域の賈胡（かこ）は美珠を得れば、身を剖（さ）きて以て之（これ）を蔵すと。諸（これ）有るか。」と。（『貞観政要』十三）

我が身を割いてでも、宝をかくすという彼らの宝への執念は、唐人たちの興味をよほど強くひいたものと見え、『広記』巻四〇〇～四〇五に収録される「宝」の項などを見渡しても、同類の話が少なからず見いだされる。そのかくし場所については、或いは『貞観政要』に見えるように、股（もも）を割くといい、[13] 或いはまた、臂腋（ひえき）（二の腕や、わきの下）を割くという。[14]

そして、彼ら胡人が追い求める宝も、「破山剣」（「破山剣」、『広記』二三三、出『広異記』）、「宝骨」（「宝骨」、四〇三、出段成式『酉陽雑俎（ゆうようざつそ）』）、「鎮国椀（ろうしゅうばくよう）」（『広記』四二一、出李復言『続玄怪録』）、「象牙」（「閩州莫徭（ろうしゅうばくよう）」、[15]『広記』四四〇、出『広異記』）などの例が見られるものの、その大部分を占めるのは、右に示した『貞観政要』に見えるように、「宝珠」である。

「陸顒伝」に見える宝は、

1　消麺虫　　2　宝珠

の二つに分けられる。1の消麺虫は、従来ほとんど論じられることのなかったものであるため、本稿では次項で詳しく論じることとし、ここでは、2の宝珠について見る。[16]

「陸顒伝」にいう宝珠が、「南海」より得たものであるという記述からすれば、そこで産出する真珠の類と見て、ほぼ間違いないであろう。[17]「南海の珠」について触れたものは、六朝志怪・唐代伝奇の類にも、古くは、梁・任昉（じんぼう）『述異記』（「鯨魚目」、『広記』四〇二）以来、少なからず見出される。[18]

作品中、消麺虫によって、呼び出された海中世界からの使者のも

たらした宝珠を二度に渡って拒絶し、三度目にしてようやく得た「至宝」と呼ばれる宝珠が至宝たるゆえんは、それ自身の価値もさることながら、

① それを呑むことよって、海中世界を自由に動き回ることが出来ること。
② その威光によって、海中世界に生息する「鱗介の属」を退けることが出来ること。
③ そうしたことにより、海中世界のおびただしい宝を手に入れることが出来ること。

と言う働きであろう。消麵虫と、それを通じて得たというこの宝珠との共通点として、本稿注14に挙げた「宝を呼び寄せる力」とは、この事を言う。

宝珠を単なる宝ではなく、何らかの特別な力を有するものとする見方は、志怪・伝奇に共通して見られる。その、代表的な「力」として、彼らが考えたものは、夜中、光を発するというものから始まって[19]、以下、

ア 珠を得ることによって、得た人に幸運（富や高い地位）を招く[20]。
イ 珠を持つことによって、持った人を災難から守る[21]。
ウ 珠を土中に埋めると、そこから清水が湧く、或いは珠を濁水に投ずることにより、それを清水に変える[22]。

などが挙げられる。

「陸顒伝」に見える「至宝」と呼ばれる珠の働きは、右のうち、ア（部分的にはイ）のバリエーションと言うことができようが、伝奇の中には、本作品と極めてよく似た話もいくつか存在する。

まず、「魏生」と言う話には、「宝母」という、「至宝」とそっくりの「他の宝を呼び寄せる宝」が登場する。

魏生というものが、暴風雨の後、砂磧の中から見つけた石片を胡人たちの開く「宝会」（宝の品評会）で見せたところ、胡人が高価で購いたいと申し出、どんどん価格をせり上げ、とうとう一千万という法外な値で売ることとなった。そこで、この宝の価値を胡人に尋ねると、「これこそ自分たちの本国で紛失し、長く行方を求めていた「宝母」である。毎月望の日（陰暦十五日）に、王自らが、直接海辺に出かけ、壇を設けてこれを祭ると、明珠や宝貝が皆自然に集まってくる。そこで「宝母」と名付けたのである。」と（『広記』四〇二、出皇甫氏『原化記』。傍点は増子。以下特に断りがない場合は同じ）。

次に、その珠ないしはそれを何らかの方法で加工したものによって、水上や水中を自由に動き回れるという話には、「宝珠」、「鬻餅胡」がある[23]。この二つの話は、それぞれ「陸顒伝」とまさに瓜二つの内容を持つ。

「陸顒伝」と、これらの話との共通点を整理すると、

① 鍋（または鼎）で、珠を煮る（「陸顒伝」では、煮るのは珠ではなく消麺虫）。
② それにより、海中から使者が呼び寄せられる（「宝珠」）。
③ 「陸顒伝」では、珠を呑むと言い、「宝珠」では珠と二竜女を合して膏薬状としたものを足に塗ると言い、「鬻餅胡」では、削った珠を油で煮溶かしたものを体に塗ると言い、それらの方法によって海上（「宝珠」）または海中（「鬻餅胡」、「陸顒伝」）を自由に動き回ることが出来る。
④ 珠を何らかの形で身につけて海中にはいると、竜神や鱗介の族が畏れ避けて、このため海中の宝を自由に我がものとすることが出来た（「鬻餅胡」、「陸顒伝」）。

となる。これを見ても、この三話がそれぞれ何らの関連もないと見なすことは困難と言ってよい。むしろ、話の類似性からすれば、三者の間に何らかのつながりを見る方が自然ではあるまいか。[24] もし、仮にこれらの間に何ら関係がないとしても、後世の時代区分で言う中唐から晩唐の頃にかけて同様の話が流布していたことだけは、ほぼ間違いないであろう。こうした背景を考えずに、ただ単に偶然の一致としたのでは、これらあまりにも酷似した三話の関係を考えることが出来ないからである。

三

以上のように、「陸顒伝」で重要な役割を演じる胡人と宝の話は、六朝志怪や同時代の伝奇の中に見られる類話の延長線上に位置づけられるものであった。

それでは、「消麺虫」という奇妙な虫は、どのように位置づけるべきであろうか。

本稿のはじめで紹介した「陸顒伝」の梗概に見える「消麺虫」の主な特徴は、

① それが腹中にあるときは、麺がいくらでも食べられる。
② その形状は、青い蛙のようである。
③ それを用いて、他の宝を呼び寄せることが出来る。

という三点である。

このうち、①について、胡人は、

此虫禀天地中和之気、而結。故好食麺。蓋以麦自秋始種、至来年夏季、方始成実、受天地四時全気。故嗜其味焉 ― この虫は、天地中和の気をうけて生じました。[25] ですから、麺をよく食べるのです。と言いますのは、麦というものは、秋に植え、翌年の夏に実がなります。つまり、（この間に）天地の四季の気全てをうけているので、この虫は麺を好むのです。

と説明する。

この種の話として良く知られているのは、時代はかなり降るが、清・蒲松齢『聊斎志異』の「酒虫」と題された作品であろう。

長山県（山東省鄒平（すうへい））の劉某は、大変な酒好きで、一度に一

甕を空けてしまうほどであった。ある時、番僧（異人の僧）がやって来て、いくら酒を飲んでも酔わないのは、腹中に酒虫がいるためだと言って、彼を日向に俯せに寝かせ、手足を縛って顔の先三尺ばかりの所へ酒を置く。すると、乾きに耐えかねた酒虫がのどから出ると、酒の中に飛び込んだ。これは何かと尋ねると、番僧は、これは酒の精で、これを水に溶かすとうまい酒ができると答え、その虫を引き取って去った。以後、彼は、酒が大嫌いとなり、それに歩調を合わせるように、豊かだった彼の家は零落して三度の食事にも事欠くようになった（巻五）。

その形状は、「赤肉長三寸」ほどであり、目も口も備わっていたとする。この「酒虫」の特徴のうち、

(ア) それが、腹中にあると、いくらでも食べられたり飲めたりすること。

(イ) それが富と関わりがあること。

の二点は、共通するが、その形状に著しい相違が見られる。その虫が腹中にあるといくらでも酒が飲めたという記述から見れば、「酒虫」が、「陸顒伝」ないしは、同系統の話を意識したものであることは、ほぼ間違いないであろう。しかし、この形状の著しい相違を思ったとき、「酒虫」が「消麺虫」の、いわば直系の子孫と見るのにはためらいを禁じ得ない。やはり、その原型は、他に求めるべきではないか。

先行の論考において、「酒虫」が直接基づいたと目されているのは、南宋・洪邁『夷堅志・丁志』巻一六「酒虫」である。[26] この記述では、その虫が富と関わりを有するか否かについての言及は―今日伝えられている欠字の多いテキストを見る限りにおいては―ない。しかし、

① 虫が腹中にあるうちは、いくらでも酒が飲めたとしている点。

② 姿について、「塊肉　肝の如く」「黄上□□□猶微動す。」とある点。

などから、この記述が「酒虫」の着想に少なからぬ影響を与えたことは十分予想され、「陸顒伝」に比べ、確かに、より濃厚な、いわば「血のつながり」を見ることができる。それでは、この三者の関係はどのように捉えるべきであろうか。

これらの関係を明らかにし、本稿の本題である「消麺虫」の特徴を明確化するためには、唐代以前の類話の状況を眺める必要があろう。

「その虫が腹中にあることによって、いくらでも飲食できた」と言う内容を持つ話として、今日我々が見出すことのできる最も古いものは、『太平御覧』八四九に引く、南朝・宋（四二〇―四七九）の東陽無疑『斉諧記』[27] に見える記述であろう。

江夏郡安陸（湖北省）に、東晋の隆安頃（三九七―四〇一）、三人の兄弟があり、その長男が流行病にかかって以来、米を一

斛（十斗。東晋では約二〇リットル）も食べるので、とうとう家を追い出されてしまう。やがて空腹にさいなまれた彼は、他家の畑に植えてある韮と大蒜を一畝分食べると、虫を吐き出した。その虫は、竜のような形をしており、地面に落ちるとだんだん大きくなり、試みに飯粒を与えると、それを溶かして水にしてしまった…。

さらに、『広記』四七三に引く、「怪哉」（出梁・殷芸『小説』）には、腹中にある虫ではないが、「酒虫」と極めてよく似た虫が登場する。

漢の武帝が、甘泉宮に御幸した時、馳道（天子の通る道）に、頭も歯も耳も備わった赤い虫があった。それが何という虫かわからなかったので、東方朔にこれを見せたところ、昔罪無くして繋がれた庶民の愁いや怨みが、凝って虫になったものだという。帝が、どうすればこの虫を取り除くことができるかと下問すると、朔は、「およそ憂いは酒を用いて解くと申します。この虫も酒で解けましょう。」と答える。その言葉の通りすると果たして虫はとけてしまった。

これらの例では、虫と富との関係には言及されていないが、そこに見える虫の姿は、「消麺虫」よりもむしろ後代の「酒虫」に近い。あるいは、『夷堅志』の「酒虫」の発想の原点はこのあたりに求めるべきか。

降って、唐代伝奇にこうした例をさがすと、『広記』二二〇に引く「句容佐史」（出戴孚『広異記』、作者未詳『異疾志』）と言う話が、[28]「陸顒伝」と極めてよく似た構成を持っていることに気がつく。

句容県（江蘇省）の佐史（属官）は、鱠が好物で一度に数十斤（唐代の一斤は約五九〇グラム）食べる。しかもそれでも食べ足りない。県令が試しに鱠百斤を食べさせてみたところ悶絶し、やがて麻靴の底[29]のような虫を吐き出した。これを揚州へ持っていき売ろうとすると胡人が買いたいと申し出、自ら値段を三百貫までつり上げる。そこでこの虫は何かと尋ねると、これは「銷（消に同じ）魚の精」と言い、人の腹中の病の塊を溶かすものである。今、本国の太子が病気なので、持って帰って売れば、千金の儲けになると言う。そこでその半分を売った。

この話は、ディテールに相違はあるものの、

① その虫が腹中にあるとき、ある食物や飲み物がいくらでも食べられる点。
② それを胡人が高値で購いたいと申し出る点。
③ 胡人がそれだけの大金を投じる理由は、虫が何らかの不思議な力を持つためであるとした点。

は、「陸顒伝」と全く同じと言ってよい。しかし、ここに見える虫の姿もまた、南朝・宋の『斉諧記』から清の『聊斎志異』に至るま

での、虫の姿の系譜に連なるものである。

このように見てくると、こうした、いかにも寄生虫然とした姿が、この種の話のいわば本流ではないかと思われる。我が国の遺跡の厠跡からしばしば少なからぬ寄生虫卵が発見されることなどからも明らかなように、恐らく当時の人々にとって、寄生虫はごく身近な存在であったこと。さらには、「腹中の虫」と称する以上は、寄生虫様の虫を想像する方が、より自然であると考えられるからである。

それでは、「消麵虫」の姿すなわち、「長二寸許、色青、状如蛙―長さ二寸ほどで、色は青く、蛙のような姿」というは、作者の完全な創作と考えるべきか否か。

田口暢穂「韓愈の『答柳柳州食蝦蟇』詩をめぐって」によれば[30]、魏晋以来の蛙をうたった詩は、

① 蛙を以て小人の喩えとする。
② 有能の士と結びつける。
③ 長雨・大水の景。
④ 水辺の景色の点景。

等に分類されるという。一方、志怪・伝奇では、右に見る詩の世界とは趣を異にし、蛙を主人公とする奇談の類が散見する。

そうした奇談の一つとして注目すべきものに、「腹中の蟾蜍（せんじょ）（ひきがえる）」を扱った話がある。

周客子という人に娘があった。彼女は、膾をいくら食べても飽食しない。この為、家は貧しくなった。ある時、長橋（ちょうきょう）（江蘇省宜興県か[31]）まで来ると、漁師が魚をさばいて膾にしているのを見た。そこで、銭一千でそれを買い、食べ始めたが、五斛食べたところで、吐いてしまう。するとそこから蟾蜍が出てきた。下女が魚をその口に置いたところたちまちその魚は水になってしまった。娘は以後二度と膾を食べなかった（『太平御覧』八六二、出『斉諧記』）

右の話を明らかに下敷きにしたと思われる唐代伝奇に、寶維鋈（とういよく）『広古今五行記』に見える話がある[32]。この話は、後世、「意を作り、奇を好む」と称せられた伝奇にふさわしく[33]、前代の『斉諧記』に比べると、年代を具体的に晋の太元八年（三八三）と設定したり、娘の様子を事細かに描写するなど、かなり曲折に富んだ内容となっている。このうち、蟾蜍を吐き出したことにより、膾が食べられなくなったことを記すのみで、胡人採宝譚的要素が全く認められないところは、『斉諧記』と同じである。この点からすれば、この伝奇の成立が古いのではないかという推測もできぬではないが[34]、作者の伝記そのものが未詳であるために、作品の成立時期もまた未詳とせざるを得ず、従ってその推測も、あくまで推測の域を出ない[35]。しかし、そのことはおくとしても、唐代において、こうした話がかなり忠実に前代から伝承されていたことだけは確実に言えることと思う。従って、「陸顒伝」の作者が、先の「酒虫」系の話と共に、こうした話から着想を得たと見ることもまた十分可能であろう[36]。

以上のように、「消麵虫」のイメージのうち、

① それが腹中にある時は、あるものがいくらでも飲食できる。

② その姿が蛙のようであった。

という二点は、志怪、とりわけ今日我々が目にしうるものとしては南朝・宋の東陽無疑『斉諧記』に記された内容と酷似する。このことから、「消麵虫」の着想もまた、前項の胡人と宝の場合と同じく、先行の文献 ― より直接的には『斉諧記』などの志怪、もしくはそうした志怪の影響を受けて成ったと思われる伝奇（戴孚『広異記』や竇維鑅『広古今五行記』？など）から着想を得たことが推定された。[37] これに前項に示した、「他の宝を呼び寄せる宝の話」などの要素が加味されて作り上げられたのが「消麵虫」だったのであろう。

それでは、作者はただ単に種々の話をつなぎ合わせただけなのであろうか。もし仮にそうであるのなら、この作品をどのようなものとして捉えるべきなのか。― この問題は、下編で考えることとしたい。

【注】

(1) 初出は創元社、一九四一年。本稿では、『（増訂）長安の春』（平凡社東洋文庫、一九六七年）によった。

(2) 石田論文を補う論考に、

① 富永一登「唐代小説に見えるペルシア人」（『シルクロードの歴史と文学』、第一法規、一九八一年）

② 荘司格一『中国中世の説話 ― 古小説の世界 ―』（白帝社、一九九二年）

があり、それぞれ石田論文未載の数話を付け加える。また、本稿執筆中に発行された雑誌『しにか』一九九七年十月号（大修館書店）所載の佐々木睦「胡人と宝の物語」には、野間洋介採集「唐・五代伝奇小説における胡人と宝の物語」の表を引いている。同表では、『太平広記』以外からも話を採集し、その数は四十六話に及ぶ。詳細は、これらの文献を参照されたい。

(3) 国子監所管の学校の一つ。唐制では、五品以上の子弟の入学が許されていた（『文献通考』巻四一）。

(4) 今村与志雄『唐宋伝奇集』下では、「ここでは、いまのインドシナ半島から東南アジアを視界におさめていると解釈したほうがよいか。」とする（岩波文庫、一九八八年）。

(5) 蛟人之室ともいう。蛟人は、「鮫人」とも表記する。これについては、本稿の下篇で詳しく述べる。

(6) 『太平広記』は、以後、『広記』と表記し、「巻」の字も省略し、数字のみ記す。

(7) 邱永漢「消麵故事」（『食は広州に在り』所収。初出は、文芸

春秋社、一九五八年。本稿は、中公文庫［一九七五年］によった）など。

（8）先に引いた石田論文以外に、本作品について触れた論考のいくつかは後述するが、作品そのものを考究したものとは言い難い。今回、筆者が目にした訳注書のうち、用語まで、比較的詳細に言及しているのは、国内のものでは、

① 漢文資料編集会議『伝奇小説』（大修館書店、一九七一年）

② 今村与志雄『唐宋伝奇集』下（前出）

中国のものでは、

① 王汝濤主編『太平広記選』下（斉魯書社、一九八一年）

② 葉桂剛ほか『中国十大伝奇賞析』下（北京広播学院出版、一九九二年）

の四種があった。なお、「陸顒伝」を古典小説の一つとして紹介したものとしては、劉世徳ほか『中国古代小説百科全書』（李剣国執筆）、中国百科全書出版社、一九九三年）がある。

（9）これから触れるいくつかの用語については、先行の論考の蓄積が少なからずある。詳しくは、その方面の専著に譲ることとし、本稿では、あくまでも本作品を考える上で必要と思われる用語のみを整理しておきたい。

（10）荘司格一『中国中世の説話』（本稿注2に既出）では、「この胡は南越である。」とする（同書六二頁）。

（11）これについては、古くは、桑原隲蔵「隋唐時代に支那に来住した西域人に就いて」にも指摘がある（初出は、『内藤湖南博士還暦祝賀支那学論叢』、一九二六年。本稿は『桑原隲蔵全集』第二巻を参照した。岩波書店、一九六八年）。植木久行『唐詩の風土』によれば、とりわけ、その中心地の広州は唐代第一の海外貿易港として繁栄し、蕃坊と呼称される外国人居留地に住む外国商人等の数は十万を超えたという（研文出版、一九八四年）。

（12）さらに付言すれば、「陸顒伝」と同じく、『宣室志』に載せる別の話にも、宝珠を求めて「海を越え、山を踰え」て唐へやって来た胡人について記すが（「厳生、『広記』四〇二）、この胡人は、水の少ない「西国の人」とする。これなどは、明らかにペルシア人乃至はアラビア人を念頭に置いたものであり、「陸顒伝」の表現とあわせ考える必要があろう。

（13）「青泥珠」（『広記』四〇二、出戴孚『広異記』）、「李勉」（同巻、出薛用弱『集異記』）など。

（14）「径寸珠」（『広記』四〇二、出『広異記』）、「麞餅胡」―餅（我が国で言う餅ではなく、小麦粉を材料とする食品）を売る胡人―（『広記』四〇二、出皇甫氏『原化記』）など。また、死んだ胡人の口中にかくすというバリエーションも存する（「李約」、『広記』一六八、出李綽『尚書故実』「李勉」本稿注11に既出。「李灌」『広記』四〇二、出李伉『独異志』）など。「陸顒伝」で、胡人が海中に潜る際に、「珠を呑む」としたのとあわせ考えるべきか。

（15）閬州とは、唐代置かれた州の名。四川省閬中県の西。莫徭とは、少数民族の名。

（16）両者の共通した働きは、「他の宝を呼び寄せる力」であろう。

(17) 「珠」は、淡水や海水に生息する貝類の作るものを言う。

(18) 「鯨魚目」には、上は「竜珠」から「蛇珠」に至るまでの宝珠の序列が示されている。なお、「南海」の持つイメージについては、本稿の下篇で、やや詳しく述べたい。

(19) 「隋侯」(『広記』四〇二、出晋・干宝『搜神記』)以来、志怪・伝奇に見出される。

(20) 「玉猪子」(『広記』四〇一、出唐・牛粛『紀聞』?〔『広記』原文には、『紀聞列異』とするが、李剣国『唐五代志怪伝奇叙録 上』(南開大学出版社、一九九三年)の見解に、ひとまず従うこととする。)、「衛慶」(『広記』四〇二、出皇甫枚『三水小牘』)など。

(21) 「上清珠」(『広記』四〇二、出段成式『酉陽雑俎』)、「紫靺羯」(『広記』四〇三、出唐・戴孚『広異記』)など。

(22) 「水珠」(『広記』四〇二、出唐・牛粛『紀聞』)、「清水珠」(同書同巻、出張読『宣室志』)、「青泥珠」(本稿注13参照)など。このような力を珠に求めた理由として、富永一登「唐代小説に見えるペルシア人」(本稿注1参照)は、砂漠の人々の感情を反映したものとする。が、その一例として挙げた「青泥珠」は、確かに泥水を清水に変える働きを持つものとされてはいるものの、そこに期待されているのは、濁った泥水を清水に変えることそれ自体ではなく、それによって泥水の中に隠されている宝を手に入れることに、より力点を置くものと見るべきであろう。

(23) 「宝珠」(『広記』四〇二、出唐・戴孚『広異記』)、「羃餅胡」(本稿注14参照)。

(24) これらを収録する作品集のうち、「宝珠」を載せる戴孚『広異記』の成立が最も古いとされていることからすれば、他の二話に直接的ではないにせよ、何らかの影響を与えたと想像するほうが、実態を反映していると言うべきであろう。なお、「陸顒伝」を収載する『宣室志』と、「羃餅胡」を収録する『原化記』の成立の先後関係については、『原化記』が、晩唐に成立したこと以外は――作者のことをも含めて――ほとんどわかっていないため、未詳である。程毅中『唐代小説史話』(文化美術出版社、一九九〇年)では、①『宣室志』、②『原化記』の順、李剣国『唐五代志怪伝奇叙録』(前出)では、それとは逆に、①『原化記』、②『宣室志』の順とするが、何れの説も確証を欠く。

(25) 「中和」には、儒教・道教二通りの概念がある。すなわち、前者では、「中和」の境界に達すると「天地位焉、万物育焉――天地はあるべき位置を占め、万物は育まれる」(『礼記』三一「中庸」)と言い、一方後者では、「元気」すなわち、太陽・太陰・中和を言う。この場合、後者か(以上、今村与志雄『唐宋伝奇集 下』〔前出〕参照)。

(26) 朱一玄『聊斎志異資料匯編』(中州古籍出版社、一九八六年)。なお、本稿で参照したテキストは、何卓点校『夷堅志』第二冊(台湾明文書局、一九九四年)である。同書は、商務印書館・涵芬楼蔵本を底本に何卓が一九八〇年に点校したものをリプリントしたものという。

(27) この話は、魯迅『古小説鉤沈』にも、『太平御覧』八四九に

引く『斉諧記』の一節として載せられている。ところが、前野直彬・尾上兼英『幽明録・遊仙窟』（西岡晴彦執筆）、平凡社東洋文庫43、一九六五年初版、一九九二年一九版）では、梁・殷芸（いんうん）『小説』の一節とする。同書では、底本として『古小説鉤沈』を使用した旨明記してあったが、『古小説鉤沈』の数種のテキストをあたったが、増子が見た通りであった。さらに、周楞伽（りょうか）『殷芸小説』（上海古籍出版社、一九八四年）にも、この記事は載せない。念のため、『魯迅輯校古籍手校』（北京魯迅博物館、上海魯迅紀念館、一九九一年）も参照したが、殷芸『小説』には見えず、『斉諧記』収載としてあることに変わりなかった。従って、右記の東洋文庫所収の訳本が、この話の出典を殷芸『小説』とするのは、誤りであると判断してよいであろう。

(28) 李剣国『唐五代志怪伝奇叙録』（前出）によれば、『広記』がこのように二種のテキストを併記するのは、前者の内容に後者が手を加えたためであると説明する（同書下巻、一二八九頁）。

(29) 原文「麻靴底」。麻靴は、麻鞋とも言い、麻を編んで作った靴。新疆省吐魯番墓からの出土品の写真を見る限り、今日我々が目にするスニーカーやデッキシューズ様のデザインである（上海市戯曲学校中国服装史研究組『中国歴代服飾』、学林出版社、一九八三年）。その底と言うのであるから、舌平目のようなものを想像すればよいか。

(30) 『鶴見大学紀要』第二四号　第一部「国語・国文学篇」（一九八七年）

(31) 長橋は、河南省臨漳（りんしょう）県にもある。この話は、具体的にどこの話かは述べられていないが、

① これに基づいたと思われる伝奇（詳しくは後述）が、義興（隋唐の宜興の呼称）の話と明記していること。

② 宜興の長橋は、人に害をなす蛟（みずち）を斬ったと言う伝説で知られ（『晋書』巻五八「周処伝」）、こうした話の舞台として、相応しいこと。

などから、江蘇省宜興県の長橋と推定した。さらにまた、蛟を斬った人物が、志怪の登場人物と同姓であることも注目すべきであろう。

(32) 『広記』四七三に「蟾蜍」として引かれる。なお、李剣国『唐五代志怪伝奇叙録　上』では、この話が基づいたのは、斉・祖冲之（そちゅうし）『述異記』であるとする（同書一三一頁）。その拠り所となった魯迅『古小説鉤沈』を確認した結果、この指摘が誤りであることが判明した。

(33) 明・胡応麟『少室山房筆叢』巻三六「二酉綴遺　中」

(34) また、この話の末尾に、「時に大いに兵乱有り」とあり、この「事件」が、社会情勢と関連づけて説かれている点なども、前代の志怪と酷似し、成立時期の古さを思わせる。

(35) 李剣国『唐五代志怪伝奇叙録　上』では、この人物は、『旧唐書』巻一八三「外戚伝」に見える竇維鑒（せん）もしくは、その兄弟ではないかとする。もし、その説通りだとすれば、その在世は玄宗の天宝年間（七四二―七五六）前後と推定しうる。そうなればこの伝奇は、『宣室志』より前代に成立したことになる。しかしながら、これもあくまでも推測の域を脱し得ない。ただ、

右に示した理由同様、一つの可能性を示すのみにとどめる。

(36) 「陸顒伝」を収める『宣室志』の中にも、僧の姿に変身した蛙が登場する話がある（「石憲」、『広記』四七六）。これを見ても、作者―そして作者が想定した読者たち―のイメージの中に、一種不可思議な蛙というものが存在した可能性があるものと思われる。

(37) それでは、先に挙げた「消麵虫」のイメージのうち、「色青」をどのように捉えるべきであろうか。

「青い蛙のような姿」で思い出されるのは、青蛙の神を題材とした『聊斎志異』巻十一に載せる「青蛙神（せいあしん）」の二つの話であろう。この話は、江・漢すなわち、漢江から長江にかけての地方の人々が青蛙の神を尊崇していることから説き起こされ、その祟りや、霊験が述べられている。これらの話から、作者・蒲松齢の生きた清代の青蛙神信仰の一端が窺われ、あるいは唐代の状況を類推することができるのではないかと思われるのであるが、何分にも時代の隔たりがあまりに大きく、管見ではその間の溝を埋めるだけの有効な資料を見出し得なかった（朱一源『《聊斎志異》資料匯編』〔前出〕でも、清・東軒主人の『述異記』所載の「青蛙神」という話を引用するのみで、それより古い時代の類話にまで説き及んでいない。この話、そして、青蛙神信仰の古型をたどることの困難さを示すものといえよう）。

次に、蛙から離れ、宝や富と関連した「青い虫」の話へと目を転じると、青蚨（せいふ）という虫の話が浮かび上がってくる。この虫は、『太平御覧』巻九五〇に、漢・劉安『淮南万畢術』から引くとして載せられている話であるが、この虫の親子の血をそれぞれ別の八十一銭に塗りつけて、別々に使うと、親は子を子は親を慕って飛び帰ってくると言われる（晋・干宝『搜神記』巻三二では、これは、この虫の親子の情が濃いために、互いに慕い合って飛び帰るのだと説明する）。以後、青蚨は、銭の異称ともなる。陸顒伝にいう「青い色の虫」とはこれを念頭に置くか。待考。